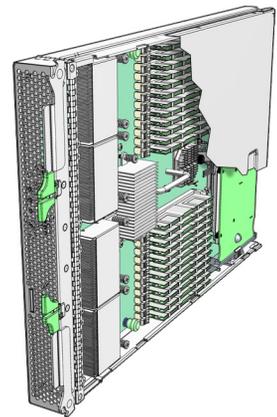


Sun Blade™ X6450 サーバーモジュール 設置マニュアル



Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

部品番号 820-5615-10
2008年7月、改訂A

本書についてのご意見・ご感想は、<http://www.sun.com/hwdocs/feedback> のフォームを使って弊社までお送りください。

Copyright © 2008 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

この配布物には、サードパーティによる情報が含まれることがあります。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴ、Java、Netra、Solaris、Sun Ray、Sun™ ONE Studio、Sun Blade X6450 Server Module、Sun StorageTek™ RAID Manager ソフトウェア、および Sun の会社ロゴマークは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Intel® は Intel Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。Intel® Xeon® は Intel Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。Intel Inside® は Intel Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

CPU の予備品または交換品の使用は、米国の輸出法に準拠して輸出された製品の CPU の修理または 1 対 1 での交換に限り許可されています。米国政府の許可を得ることなく、製品のアップグレード目的で CPU を使用することは、固く禁じられています。

本書は、「現状のまま」の形で提供され、法律により免責が認められない場合を除き、商品性、特定目的への適合性、第三者の権利の非侵害に関する暗黙の保証を含む、いかなる明示的および暗示的な保証も伴わないものとします。



リサイクル
してください



Adobe PostScript

目次

はじめに vii

1. 概要 1

本書で使用している用語および参照ドキュメント 1

設置の概要 2

電源投入と電源切断（通常の方法） 3

▼ スタンバイ電源を供給する 3

▼ すべてのサーバーコンポーネントの主電源を投入する 3

▼ 主電源をオフにする 5

ディスクレスサーバーについて 5

コンパクトフラッシュドライブ 6

ファイバチャネル接続を使用した外部ストレージデバイスへの接続 7

ブートプロセスについて 8

BIOS および BIOS 構成ユーティリティー 8

ブートローダー 9

GRUB 10

Windows ブートローダー 10

BIOS 構成ユーティリティー 10

- ▼ BIOS でネットブートまたはコンパクトフラッシュブートを構成する 11
- ▼ BIOS で QLogic Fibre Channel を構成する 11
- ▼ BIOS で Emulex Fibre Channel PCIe ExpressModule を構成する 12
- ▼ Sun Blade RAID Expansion Module を構成する 12
- ▼ Sun Blade 0/1 RAID Expansion Module を構成する 13
- ▼ ネットワーク経由で OS を読み込む (ネットブート) 13

RAID の構成 13

オペレーティングシステムのインストール 14

コンソール出力の送信 15

2. サーバーモジュールの設置および構成 17

サーバーモジュールの挿入 17

- ▼ サーバーモジュールを挿入する 17

ELOM へのアクセスと構成 19

ELOM のネットワーク構成の表示 20

- ▼ CMM iLOM の CLI を使用して ELOM の IP アドレスを表示する 20

ELOM への接続 21

- ▼ ELOM Web GUI に接続する 21
- ▼ ELOM CLI に接続する 23

ELOM のネットワーク構成 (省略可) 23

- ▼ ELOM のネットワーク情報を設定する 23

システムコンソールへのアクセス 24

- ▼ システムコンソールに直接アクセスする 25
- ▼ CLI を使用してシステムコンソールにアクセスする 25
- ▼ Web GUI を使用してシステムコンソールにアクセスする 26

ドングルケーブルの接続 28

A.	インストールのためのワークシート	31
B.	BIOS 構成ユーティリティーを使用した Sun Blade RAID Expansion Module の構成	35
	BIOS RAID 構成ユーティリティーの概要	36
	BIOS RAID 構成ユーティリティーでのホットプラグに関する制限事項と条件について	36
	ホットアンプラグによる取り外しの条件	37
	ホットプラグでの追加条件	37
	ホットアンプラグおよびホットプラグによる交換/再挿入の条件	37
	BIOS RAID 構成ユーティリティーの実行	38
	▼ BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動する	38
	▼ BIOS RAID 構成ユーティリティーをナビゲートする	39
	ACU を使用したアレイの作成と管理	39
	▼ ACU を起動する	40
	▼ ACU で新しいアレイを作成する	40
	▼ ACU で既存のアレイを管理する	41
	▼ ACU でアレイを起動可能にする	41
	▼ ACU でディスクドライブを初期化する	42
	▼ ACU でディスクドライブを再スキャンする	42
	▼ ACU でディスクドライブの完全消去を実行する	42
	▼ ACU で実行中の完全消去を停止する	43
	-Select ユーティリティーを使用した REM 設定の変更	43
	▼ -Select ユーティリティーの使用を開始する	43
	▼ 変更を適用して -Select ユーティリティーを終了する	44
	▼ -Select ユーティリティーで一般的な設定を変更する	44
	▼ -Select ユーティリティーで SAS 固有の REM 設定を変更する	46

ディスクユーティリティーを使用したディスクドライブの管理 47

- ▼ ディスクユーティリティーでディスクドライブのフォーマットまたは
検証を行う 47
- ▼ ディスクユーティリティーでディスクドライブの位置を確認する 48
- ▼ ディスクユーティリティーでディスクドライブを識別する 48

RAID アレイの初期化 49

索引 55

はじめに

本書『Sun Blade X6450 サーバーモジュール設置マニュアル』では、サーバーモジュールをシャーシに設置する手順およびサービスプロセッサの管理者アカウントに接続する手順について説明します。

UNIX コマンドの使い方

本書には、基本的な UNIX[®] コマンドや、システムのシャットダウンや起動、デバイスの構成などの手順に関する情報は含まれていないことがあります。このような情報については、次のドキュメントを参照してください。

- システム付属ソフトウェアのドキュメント
- Solaris[™] オペレーティングシステム (Solaris OS) のドキュメント (<http://docs.sun.com>)

シェルプロンプト

シェル	プロンプト
C シェル	<i>machine-name%</i>
C シェルスーパーユーザー	<i>machine-name#</i>
Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
Bourne シェルおよび Korn シェルスーパーユーザー	#

表記上の規則

字体*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、および画面上的コンピュータ出力を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上的コンピュータ出力とは区別して示します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i>	書名、新しい用語、強調する語句、および変数を示します。変数の場合には、実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	『 <i>User's Guide</i> (ユーザーズガイド)』の第 6 章を参照してください。 これらはクラスオブションと呼ばれます。 これを行うには、スーパーユーザーである必要があります。 ファイルを削除するには、rm <ファイル名> と入力します。

* ご使用のブラウザの設定によっては、表示内容が多少異なる場合もあります。

関連ドキュメント

ドキュメントセットの説明については、システムに付属している『ドキュメントの場所』シートを参照するか、製品のドキュメントサイトをご覧ください。次の URL を参照し、ご使用の製品のページに移動してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/prod/blade.x6450>

これらのドキュメントの一部については、上記に記載された Web サイトでフランス語、簡体字中国語、繁体字中国語、韓国語、日本語の翻訳版が入手可能です。英語版は頻繁に改訂されており、翻訳版よりも最新の情報が記載されています。

Sun ハードウェアおよびソフトウェアのすべてのドキュメントについては、次の URL を参照してください。

<http://docs.sun.com>

Sun 関連ドキュメント、サポート、トレーニング

Sun の部門	URL
ドキュメント	http://docs.sun.com/
サポート	http://www.sun.com/support/
トレーニング	http://www.sun.com/training/

製品のアップデート

ダウンロードできる製品のアップデートについては、次の Web サイトのリンクを参照してください。

<http://www.sun.com/download/>

該当するハードウェアドライバのセクションを探し、「x64 Servers & Workstations (x64 サーバーおよびワークステーション)」をクリックします。Sun Blade™ X6450 サーバーモジュールのサイトでは、ファームウェア、ドライバおよび CD-ROM ISO イメージのアップデートを公開しています。

サードパーティーの Web サイト

Sun 社は、本書で挙げているサードパーティーの Web サイトの利用について責任を負いません。また、当該サイトまたはリソースから入手可能なコンテンツや広告、製品またはその他の素材を推奨したり、責任あるいは法的義務を負うものではありません。さらに、他社の Web サイトやリソースに掲載されているコンテンツ、製品、サービスなどの使用や依存により生じた実際の、または疑わしい損害や損失についても責任を負いません。

コメントをお寄せください

Sun 社は、ドキュメントの改善を常に心がけており、皆様のコメントや提案を歓迎いたします。コメントは次のサイトを通してお送りください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

フィードバックには、本書のタイトルと部品番号を記載してください。

『Sun Blade X6450 サーバーモジュール設置マニュアル』、部品番号 820-5615-10

概要

この章では、次の項目について説明します。

- 「本書で使用している用語および参照ドキュメント」(1 ページ)
- 「設置の概要」(2 ページ)
- 「電源投入と電源切断 (通常の方法)」(3 ページ)
- 「ディスクレスサーバーについて」(5 ページ)
- 「ブートプロセスについて」(8 ページ)
- 「RAID の構成」(13 ページ)
- 「オペレーティングシステムのインストール」(14 ページ)
- 「コンソール出力の送信」(15 ページ)
- 「BIOS 構成ユーティリティー」(10 ページ)

本書で使用している用語および参照ドキュメント

本書では、次の用語の使い方に注意してください。

- 「サーバーモジュール」は、Sun Blade X6450 サーバーのハードウェアを指します。
- 「シャーシ」は、Sun Blade 6000 モジュラーシステムを指します。
- 「リモートドライブ」は、サーバーモジュールの外部に配置されていてもローカルドライブとして機能するように構成されたディスクドライブを指します。
- サーバーモジュールには、*Embedded Lights Out Manager (ELOM)* が搭載されています。ELOM は、マザーボードに埋め込まれたサービスプロセッサ (SP) 上で実行される IPMI 2.0 対応のソフトウェアです。

参照ドキュメントは斜体で表記されています。参照ドキュメントは、<http://docs.sun.com> のサーバーモジュールのセクションからダウンロードしてください。

設置の概要

ここでは、サーバーモジュールのインストール手順の概要を説明します。実際の手順は第 2 章で説明します。

まずサーバーモジュールを開梱します。

1. サーバーモジュールをシャーシに挿入します。
挿入すると、サーバーモジュールがスタンバイモードで起動します。「[サーバーモジュールの挿入](#)」(17 ページ) を参照してください。
2. ELOM (サービスプロセッサ) にアクセスして構成します。サービスプロセッサを使用すると、次の操作を実行できます。
 - ネットワーク経由でシステムコンソールにリモートアクセスする。
 - サービスプロセッサの IP アドレスと MAC アドレスにアクセスする。
 - サービスプロセッサの IP アドレスを変更し、サービスプロセッサで DHCP アドレス指定または静的アドレス指定のいずれを使用するかを構成する。「[ELOM へのアクセスと構成](#)」(19 ページ) を参照してください。
3. その他のネットワークハードウェアを構成します。詳細は、「[ディスクレスサーバーについて](#)」(5 ページ) を参照してください。
4. 起動デバイスを構成または選択します。詳細は、「[BIOS 構成ユーティリティー](#)」(10 ページ) を参照してください。
5. オペレーティングシステムをインストールまたは構成します。
 - サポートされている Solaris、Linux、または VMware オペレーティングシステムをインストールする場合は、『Sun Blade X6450 サーバーモジュールオペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。
 - サポートされている Windows オペレーティングシステムをインストールする場合は、『Sun Blade X6450 サーバーモジュール Windows オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。

電源投入と電源切断（通常の方法）

このセクションでは、サービスプロセッサを動作させるためにサーバーモジュールにスタンバイ電源を供給する方法を説明します。サーバーモジュールの電源の投入方法と切断方法も説明します。

注 – サーバーモジュールの電源は、ELOM を使用してリモートで投入および切断することもできます。電源投入の手順については、「[システムコンソールへのアクセス \(24 ページ\)](#)」を参照してください。詳細は『*Embedded Lights Out Manager Administration Guide (Embedded Lights Out Manager 管理ガイド)*』を参照してください。

▼ スタンバイ電源を供給する

スタンバイ電源を供給すると、サービスプロセッサの電源が入りますが、その他のサブシステムには電源が入りません。

シャーシに電源を入れると、スタンバイ電源が自動的にサーバーモジュールに供給されます。特別な操作は必要ありません。

▼ すべてのサーバーコンポーネントの主電源を投入する

1. 電源を入れたシャーシにサーバーモジュールを挿入します。

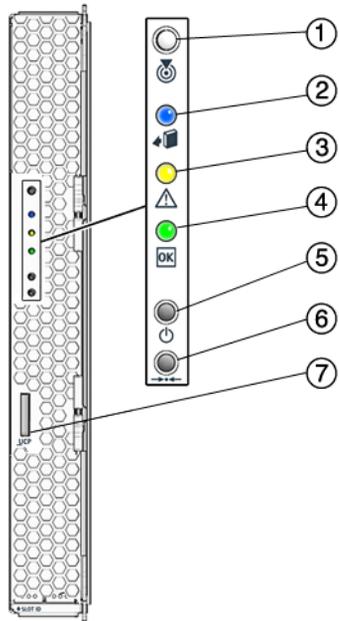
サーバーモジュールは自動的にスタンバイ電源モードで起動します。

スタンバイ電源モードでは、前面パネルの緑の OK LED が点滅し、青の取り外し OK LED は点灯したままです。図 1-1 を参照してください。

2. サーバーの前面パネルにあるへこんだ電源ボタンを、スタイラスなどの非導電性の先のとがったもので押して離します。

主電源がサーバー全体に供給されると、電源ボタンの上にある緑の OK LED が点灯し続けます。

図 1-1 サーバーモジュールの前面パネル



図の凡例

-
- 1 白の LED - 位置特定
ELOM のコマンドにより、位置特定 LED が点滅します。
位置特定 LED は手動で制御することもでき、押してからすぐに離すと、状態がオンまたはオフに切り替わります。
 - 2 青の LED - 取り外し可能
 - 3 黄色の LED - サービスが必要
 - 4 緑の LED - OK
 - 5 電源オンボタン/スタンバイ
 - 6 サービス用
 - 7 UCP (ユニバーサルコネクタポート) - ドングルケーブル用
-

▼ 主電源をオフにする

サーバーの電源をオフにするには、次の2つの方法のいずれかを使用します。

- 適切な順序でのシャットダウン: 前面パネルにある電源ボタンを、スタイラスなどの非導電性の先のとがったもので押して離します。ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) が有効な OS では、これで適切な順序での OS シャットダウンが実行されます。ACPI が有効な OS を稼働していないサーバーは、即座にスタンバイ電源モードにシャットダウンされます。
- 緊急シャットダウン: 電源ボタンを4秒間押し続けると、主電源がオフになりスタンバイ電源モードになります。

主電源がオフになると、前面パネルにある電源/OK LED が点滅し始め、サーバーがスタンバイ電源モードにあることを示します。

注 – サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーをシャーシから取り外すか、シャーシの背面パネルから AC 電源コードを取り外す必要があります。

注 – 電源ボタンを4秒以上押し続けると、サーバーモジュールの電源がすでにオフになっている場合も、サーバーモジュール内のサブシステム (サービスプロセッサ以外) の電源がオフになります。

サーバーモジュールの電源がすでにオフになっているときに電源ボタンを4秒以上押し続けた場合、電源がシステムに少しの間供給されてから再びオフになります。

ディスクレスサーバーについて

Sun Blade X6450 はディスクレスサーバーです。これは、ローカルディスクを搭載していないため、オペレーティングシステムをローカルディスクにインストールできないことを意味します。

代わりに、次の処置を行うことができます。

- オペレーティングシステムをコンパクトフラッシュにインストールします。コンパクトフラッシュはハードドライブと同じ特徴を持ち、一定のオペレーティングシステムをサポートできます。これは、オペレーティングシステムをインストールするための唯一のローカルオプションです。このオプションについては、「[コンパクトフラッシュドライブ](#)」(6 ページ) を参照してください。

- リモートドライブを構成します。リモートドライブは、サーバーモジュールの外部に配置されていても構成次第でローカルドライブとして機能します。リモートドライブは、シャーシの内外、ストレージモジュール内、または SAN などのストレージデバイス内に配置できます。「[ファイバチャネル接続を使用した外部ストレージデバイスへの接続](#)」(7 ページ) を参照してください。
- 別のサーバー上のブートイメージからサーバーモジュールをブートするディスクレスネットワーク起動を構成します。詳細は、『Sun Blade X6450 サーバーモジュールオペレーティングシステムインストールガイド』またはオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

1 台または複数のリモートドライブを構成したあとは、オペレーティングシステムのインストールを開始できます。オペレーティングシステムのインストールという点では、正常にインストールされ、構成されたリモートドライブは、ローカルドライブと変わりません。これらは、オペレーティングシステムのインストール手順でインストール先を指定するときにリストに表示されます。

オペレーティングシステムのインストール時に、BIOS で起動デバイスを選択する必要がある場合は、「[BIOS 構成ユーティリティー](#)」(10 ページ) を参照してください。

コンパクトフラッシュドライブ

Sun Blade X6450 は、一定のオペレーティングシステムをサポートできるコンパクトフラッシュデバイスを搭載しています。このデバイスは、オペレーティングシステムをインストールするための唯一のローカルオプションです。

コンパクトフラッシュからブートできるオペレーティングシステムは次のとおりです。

- S10 U4 (64 ビット)
- RHEL4.6 (32/64 ビット)
- RHEL5.0 (64 ビット)
- SLES9Sp4 (64 ビット)
- SLES10 sp1 (64 ビット)
- VMware ESX 3.0.2+

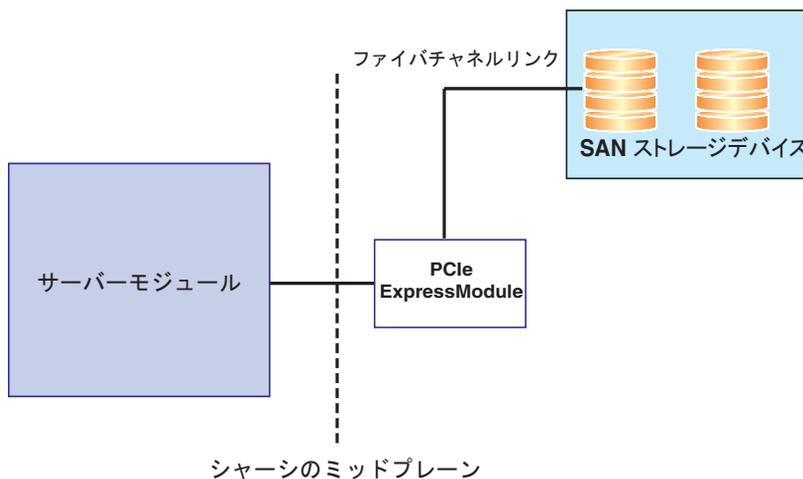
コンパクトフラッシュドライブには、適切なパフォーマンスを維持しながら対応できる書き込み数に上限があります。この上限を緩和するには、ログファイル (/var ディレクトリと /tmp ディレクトリ) を別の場所にリダイレクトするように構成します。詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

ファイバチャネル接続を使用した外部ストレージデバイスへの接続

Sun Blade X6450 は、対応する PCIe ExpressModule スロットに挿入された PCIe ExpressModule カードによって提供されるファイバチャネルリンク経由の外部 SAN への接続をサポートします。PCIe ExpressModule カードは、外部 SAN へのファイバチャネル接続を提供します。

この構成を図 1-2 に示します。

図 1-2 PCIe ExpressModule、ファイバチャネルおよび SAN



シャーシでは、各サーバースロットで 2 つの PCIe ExpressModule スロットがサポートされています。これらの PCIe ExpressModule スロットには、 $N-0$ および $N-1$ (N はサーバースロット番号) という番号が付けられます。この番号付けについては、シャーシのドキュメントを参照してください。

詳細は、PCIe ExpressModule カードのドキュメントを参照してください。

ブートプロセスについて

この節では、ブートプロセスの概要を説明します。

サーバーモジュールを起動すると、ブート方法を選択するための次の 2 つの機会が提供されます。

- BIOS – 起動デバイスとして使用するハードウェアデバイスを選択し、その他のシステム設定を構成できます。
- ブートローダー – BIOS の終了後、ブートローダーが、構成済みのオペレーティングシステムの選択肢を表示します。

BIOS および BIOS 構成ユーティリティー

サーバーモジュールの電源を投入すると、自己診断テストが実行され、テストが完了すると一連のメッセージが表示され、BIOS にアクセスして構成できるようになります。

- このときに何もしなければ、サーバーモジュールはデフォルトのデバイスからブートします。
- キーストロークを入力すると、サーバーモジュールは次のいずれかを実行します。
 - F2 キー – BIOS 構成モードに入ります。この場合、デフォルトの起動デバイスなど、さまざまな BIOS オプションを構成できます。構成が完了すると、構成した設定に従ってシステムがリブートします。

詳細は、『*Sun Blade X6450 Server Service Manual* (Sun Blade X6450 サーバーモジュールサービスマニュアル)』を参照してください。

- F8 キー – 構成済みのハードウェアブートオプションのリストを表示し、選択されたデバイスからのブートを続行します。
- F12 キー – ネットワークからブート (ネットブート) します。[「ネットワーク経由で OS を読み込む \(ネットブート\)」\(13 ページ\)](#) を参照してください。
- BIOS 構成ユーティリティー – 多くのオプションカードには BIOS 構成ユーティリティーがあり、それらを使用して、ディスクボリュームや RAID アレイなどを構成することもできます。

注 – 多くの場合、オペレーティングシステムをインストールする前に、それぞれの BIOS 構成ユーティリティーを使用してオプションカードを構成する必要があります。詳細は、[「BIOS 構成ユーティリティー」\(10 ページ\)](#) を参照してください。

ブートローダー

BIOS の電源投入時の自己診断テスト (POST) が完了すると、オペレーティングシステムがブートします。

たいていのオペレーティングシステムは、ブートローダーを開くと起動します。BIOS と同様にブートローダーもブート選択肢のメニューを表示します。このときにユーザーが何もしなければ、デフォルトの選択肢がブートされます。ただし、BIOS とは異なり、ブートローダーは起動用のハードウェアデバイスではなく、インストールされているオペレーティングシステムの選択肢を表示します。

オペレーティングシステムを選択するか、デフォルトを受け入れると、ブートローダーは、指定されたオペレーティングシステムをブートします。

ブートローダーは、一般に次の 2 種類の選択肢で使用されます。

- 異なるオペレーティングシステムのブート: たとえば、Solaris オペレーティングシステムと Linux オペレーティングシステムをそれぞれ異なるドライブまたは同じドライブ上の異なるパーティションにインストールしている場合、ブートローダーを使用してどちらかを選択できます。
- 異なるパラメータを使用した同じオペレーティングシステムのブート: たとえば、Solaris OS では、コンソール出力をシリアルポートに表示する 1 つの選択肢と、コンソール出力を VGA ポートに表示するもう 1 つの選択肢を構成できます。

注 – これは、シリアル管理ポートと VGA ポートとの間でコンソール出力を切り替えるための現在サポートされている方法です。

ブートローダーが終了すると、サーバーモジュールは、選択したデバイスからのブートを続行します。

表示されるブートローダーは、BIOS によってブートされたオペレーティングシステムの種類により次のように異なります。

- Solaris および Linux オペレーティングシステムでは、Grand Unified Bootloader (GRUB) を使用します。
- Windows オペレーティングシステムでは、Windows 独自のブートローダーを使用します。

たとえば、Solaris オペレーティングシステムと Windows オペレーティングシステムがインストールされているシステムで、BIOS により、Solaris オペレーティングシステムを格納しているデバイスがブートされた場合は、GRUB ブートローダーが表示されます。ただし、GRUB は、Windows オペレーティングシステムをブートする選択肢を表示するように構成できます。

注 – ブートローダーは詳細に構成できます。選択肢は、ローカル構成によって決まります。詳細は、ネットワーク管理者にお問い合わせください。

GRUB

GRUB ブートローダーが開くと、選択肢のメニューが表示されます。

- 選択するには、矢印キーを使って選択肢を強調表示し、Enter キーを押します。
- デフォルトの選択肢を使用する場合は、何もしません。GRUB がタイムアウトになり、デフォルトをブートします。

Windows ブートローダー

Windows ブートローダーは、GRUB と同じ基本機能を実行します。詳細は、Windows オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

BIOS 構成ユーティリティー

Sun Blade X6450 はディスクレスサーバーなので、ハードドライブに接続するためのオプションカードがほぼ必要になります。多くの場合、オプションカードは、オペレーティングシステムをインストールする前に BIOS 構成ユーティリティーを使って構成する必要があります。

- オペレーティングシステムのインストール手順で起動デバイスを選択できる場合、この節の手順は行わなくても良い可能性があります。詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。
- サーバーモジュールが REM または PCIe ExpressModule を搭載しているときに RAID を使用する場合は、対応する BIOS 構成ユーティリティーを使用してサーバーモジュールを構成する必要があります。
- サーバーモジュールが Sun Blade RAID Expansion Module を搭載している場合は、オペレーティングシステムをインストールする前にハードドライブを初期化する必要があります。

表 1-1 に、いくつかのオプションカードと、それぞれに対応する BIOS 構成ユーティリティーにアクセスするキーストロークの一覧を示します。

表 1-1 BIOS 構成ユーティリティー

オプションカード	キーストローク	BIOS ユーティリティーのドキュメント
QLogic PCIe ExpressModule	Ctrl + Q キー	PCIe ExpressModule の付属ドキュメントを参照してください。
Emulex PCIe ExpressModule	Ctrl + E キー	PCIe ExpressModule の付属ドキュメントを参照してください。
Sun Blade RAID Expansion Module	Ctrl + A キー	付録 B。
Sun Blade 0/1 RAID Expansion Module	Ctrl + C キー	x64 Servers Utilities Reference Manual (x64 サーバーユーティリティーリファレンスマニュアル)

BIOS 構成ユーティリティーにアクセスする方法を次の各節で詳しく説明します。

▼ BIOS でネットブートまたはコンパクトフラッシュブートを構成する

1. サーバーモジュールの電源を入れます。
2. F2 キーを押して BIOS にアクセスします。
3. 「Boot (ブート)」 ページに移動します。
4. 「Boot Device Priority (起動デバイスの優先順位)」 オプションを選択します。
5. メニューから起動デバイスを選択します。
選択した起動デバイスを、+ または - キーを押してリストの一番上に移動します。
6. 変更を保存します。

▼ BIOS で QLogic Fibre Channel を構成する

1. サーバーモジュールの電源を入れます。
2. Ctrl + Q キーを押して、QLogic BIOS 構成ユーティリティーを開きます。
3. 「Boot Device (起動デバイス)」 ページに移動します。
すべての起動用 HDD のリストが表示されます。
4. 起動デバイスを選択します。
5. (省略可能) 必要に応じて、ボリュームと RAID アレイを構成します。
詳細は、HBA の付属ドキュメントを参照してください。
6. 変更を保存します。

▼ BIOS で Emulex Fibre Channel PCIe ExpressModule を構成する

1. サーバーモジュールの電源を入れます。
2. Ctrl + E キーを押して、Emulex BIOS 構成ユーティリティを開きます。
3. 「Boot Device (起動デバイス)」 ページに移動します。
すべての起動用 HDD のリストが表示されます。
4. 起動デバイスを選択します。
5. (省略可能) 必要に応じて、ボリュームと RAID アレイを構成します。
詳細は、HBA の付属ドキュメントを参照してください。
6. 変更を保存します。

▼ Sun Blade RAID Expansion Module を構成する

1. サーバーモジュールの電源を入れます。
2. Ctrl + A キーを押して、構成ユーティリティを開きます。
3. このユーティリティを使用して、サーバーの BIOS (および OS (インストールされている場合)) で表示する各ディスクまたは各 RAID のボリュームを作成します。

BIOS ユーティリティでは、最大 20 のボリュームを作成できます。各ボリュームには、1 台のディスク、またはグローバル/専用ホットスペアを持つ RAID (RAID レベル 0、1、1E、10、5、または 6) を含めることができます。

BIOS ユーティリティで作成された各ボリュームは、単一のディスクドライブとしてサーバーの BIOS に表示されます。

参照:

- BIOS 構成ユーティリティを使用する場合は、[付録 B](#) を参照してください。
- その他の構成情報については、『*Sun StorageTek SAS RAID HBA Installation Guide* (Sun StorageTek SAS RAID HBA インストールガイド)』および『*Sun StorageTek RAID Manager Software User's Guide* (Sun StorageTek RAID マネージャソフトウェアユーザーズガイド)』を参照してください。

▼ Sun Blade 0/1 RAID Expansion Module を構成する

1. サーバーモジュールの電源を入れます。
2. Ctrl + C キーを押して、構成ユーティリティを開きます。
3. 画面の指示に従って、ミラー RAID を作成します。
RAID 1 (オプションのホットスベアを持つ 2 台のミラーディスク) または RAID 1E (1 つまたは 2 つのホットスベアを持つ 3 台以上のミラーディスク) のいずれかを選択できます。
4. LSI RAID 構成ユーティリティを終了します。
5. この RAID ボリュームに OS をインストールできます。

その他の構成情報については、『x64 Servers Utilities Reference Manual (x64 サーバーユーティリティリファレンスマニュアル)』を参照してください。

▼ ネットワーク経由で OS を読み込む (ネットブート)

POST の実行中に F12 キーを押すと、サーバーモジュールがネットブートというプロセスを使用してネットワークからブートします。

ネットブート環境が適切に構成されている場合、サーバーモジュールが起動すると、サーバーモジュールの IP アドレスをネットワークにブロードキャストし、対応するオペレーティングシステムをインストールして応答します。

ネットブートについては、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

RAID の構成

RAID の構成には、(オプションの) RAID Expansion Module (REM) が必要です。



注意 – ブートドライブを RAID アレイに含める場合は、オペレーティングシステムをインストールする前に RAID アレイを構成する必要があります。「[BIOS および BIOS 構成ユーティリティ](#)」(8 ページ) の説明に従って、いずれかの BIOS 構成ユーティリティを使用します。

- Sun Blade RAID Expansion Module は、グローバル/専用ホットスベアを持つ RAID レベル 0、1、1E、10、5、または 6 をサポートします。
 - BIOS 構成ユーティリティを使用する場合は、「付録 B」を参照してください。

- その他の詳細、およびオペレーティングシステムのインストール後の RAID の構成手順については、『*Uniform Command-Line Interface User's Guide* (ユニフォームコマンドラインインタフェースユーザーズガイド)』および『*Sun StorageTek RAID Manager Software User's Guide* (Sun StorageTek RAID マネージャソフトウェアユーザーズガイド)』を参照してください。
- Sun Blade RAID 0/1 Expansion Module は、RAID 1 (オプションのホットスペアを持つ 2 台のミラーディスク) または RAID 1E (1 つまたは 2 つのホットスペアを持つ 3 台以上のミラーディスク) をサポートします。
 - BIOS 構成ユーティリティーを使用する場合は、「[Sun Blade 0/1 RAID Expansion Module を構成する](#)」(13 ページ) を参照してください。
 - その他の詳細、およびオペレーティングシステムのインストール後の RAID の構成手順については、『*x64 Utilities Reference Manual* (x64 サーバーユーティリティーリファレンスマニュアル)』を参照してください。

オペレーティングシステムのインストール

サーバーを設置したあとは、オペレーティングシステムとドライバをインストールできます。サーバーモジュールは、Solaris、Linux、VMware、Windows の各オペレーティングシステムをサポートします。

- サポートされている VMware、Linux、または Solaris オペレーティングシステムのインストールの詳細は、『*Sun Blade X6450 サーバーモジュールオペレーティングシステムインストールガイド*』(820-5618) を参照してください。
- サポートされている Windows オペレーティングシステムのインストールの詳細は、『*Sun Blade X6450 サーバーモジュール Windows オペレーティングシステムインストールガイド*』(820-5630) を参照してください。
- サーバーモジュールに固有の OS に関するその他の注意点については、『*Sun Blade X6450 サーバーモジュールご使用にあたって*』(820-5612) を参照してください。

コンソール出力の送信

サーバーモジュールは、常にコンソール I/O を VGA ポートに送信します。

デフォルトでは、ELOM I/O をシリアルポートに送信します。

BIOS の「External Serial Port (外部シリアルポート)」コントロールを使用して、シリアルポート接続の動作を変更できます。

- このコントロールを「BMC」(デフォルト)に設定すると、サーバーモジュールは、ELOM 出力をシリアルポートに送信します。
- 「System (システム)」に設定した場合は、コンソール出力をシリアルポートに送信します。

これらの設定は、ドングルケーブルでの接続だけに影響します。

注 – コンソール出力は、ELOM を使用して表示することもできます。これについては、「[システムコンソールへのアクセス](#)」(24 ページ)を参照してください。

サーバーモジュールの設置および構成

この章では、サーバーモジュールの設置と構成について説明します。次の項目について説明します。

- 「サーバーモジュールの挿入」(17 ページ)
- 「ELOM へのアクセスと構成」(19 ページ)
- 「システムコンソールへのアクセス」(24 ページ)

サーバーモジュールの挿入



注意 – コンポーネントを取り扱う前に、静電気放電 (ESD) 用リストストラップでシャーシの地金に触れてください。シャーシの前面と背面の両方に接地された場所があります。システムのプリント回路基板には、静電気に非常に敏感なコンポーネントが含まれています。

▼ サーバーモジュールを挿入する

1. シャーシに挿入するスロットを確認します。
2. フィラーパネルを取り外します。
レバーを引き出して、フィラーパネルを取り出します。
フィラーパネルは廃棄しないでください。

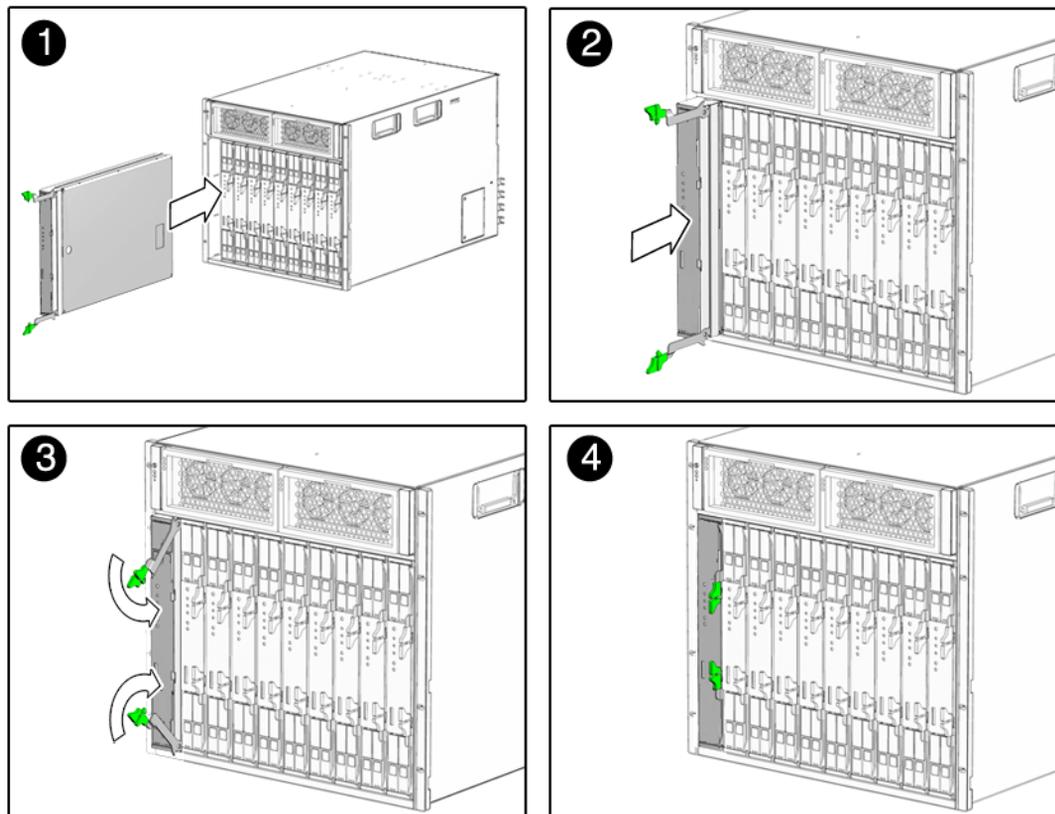


注意 – スロットが空のままシステムを動作させないでください。空のスロットには必ずフィラーパネルを挿入して、モジュールのシャットダウンを防止してください。

3. エジェクタが右側になるように、サーバーモジュールを縦にします。

次の図に、Sun Blade 6000 モジュラーシステムにサーバーモジュールを挿入する手順を示します。使用するシャーシによっては、図と異なる場合があります。
図 2-1 の 1 を参照してください。

図 2-1 シャーシへのサーバーモジュールの挿入



4. ストップに当たるまで、サーバーモジュールをスロットに押し込みます。

図 2-1 の 2 を参照してください。

5. 上の方の取り外しレバーがカチッとはまるまで、下方に回します。

サーバーモジュールとシャーシが面一にそろえられ、エジェクタがロックされます。図 2-1 の 3 と 4 を参照してください。

シャーシの電源が入っている場合、サーバーモジュールがスタンバイ電源モードで起動します。前面パネルの緑の OK LED が点滅し、青の取り外し OK LED は点灯したままです。図 1-1 を参照してください。

ELOM へのアクセスと構成

サーバーモジュールには、Embedded Lights Out Manager (ELOM) が搭載されています。ELOM は、マザーボードに埋め込まれたサービスプロセッサ (SP) 上で実行される IPMI 2.0 対応のソフトウェアです。この内蔵システム管理ソフトウェアによって、シャーシとサーバーモジュールにインストールされたコンポーネントを監視および管理できます。ELOM により、ネットワーク情報の構成、ハードウェア構成の表示と編集、重要なシステム情報の監視、およびユーザーアカウントの管理を行えます。

シャーシには、Chassis Monitoring Module Integrated Lights Out Manager (CMM ILOM) と呼ばれる独自のサービスプロセッサがあります。このサービスプロセッサを使用して、サーバーモジュールのサービスプロセッサに Ethernet で接続でき、サーバーモジュールのネットワーク情報を表示および構成できます。

以下の手順では次のことを想定しています。

- シャーシの電源がオンになっている
- CMM ILOM がネットワークに接続され、正常に動作している
- インストーラが CMM ILOM と同じサブネットに Ethernet 経由でアクセスできる

これらの条件が整っていない場合は、『*Integrated Lights Out Manager (ILOM) Administration Guide for Sun Blade 6000 Modular System* (Sun Blade 6000 モジュラーシステム用 Integrated Lights-Out Manager (ILOM) 管理ガイド)』、その他のシャーシのドキュメント、および『*Embedded Lights Out Manager Administration Guide* (Embedded Lights-Out Manager 管理ガイド)』を参照してください。

注 – CMM ILOM と ELOM は、同じ管理者アカウントが事前構成された状態で出荷されています。ユーザー名は root、デフォルトのパスワードは changeme です。

この節の手順では、ELOM が正常に動作することを確認し、IP アドレスなどのネットワークパラメータを構成できます。手順の内容は次のとおりです。

- CMM ILOM を使用して ELOM のネットワーク構成を表示します。この手順により、ELOM が存在し、動作していることを確認できます。「[ELOM のネットワーク構成の表示](#)」(20 ページ)を参照してください。
- ELOM に接続できることを確認します。「[ELOM への接続](#)」(21 ページ)を参照してください。
- 必要に応じて、CMM ILOM を使用して ELOM の IP アドレスを構成します。「[ELOM のネットワーク構成 \(省略可\)](#)」(23 ページ)を参照してください。

これらの手順が完了すると、ELOM が構成され、Ethernet からアクセスできるようになります。

ELOM のネットワーク構成の表示

この手順では、ELOM が正常に動作していて、CMM ILOM を介してアクセスできることを確認します。

注 – ELOM のネットワーク構成は、CMM ILOM の CLI または GUI を使用して表示できます。GUI を使用する場合は、『*Integrated Lights Out Manager (ILOM) Administration Guide for Sun Blade 6000 Modular System (Sun Blade 6000 モジュラーシステム用 Integrated Lights-Out Manager (ILOM) 管理ガイド)*』を参照してください。

▼ CMM ILOM の CLI を使用して ELOM の IP アドレスを表示する

1. CMM ILOM の CLI にログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
show /CH/BLn/SP/network
```

n はサーバーモジュールの番号またはシャーシのスロット ID です。

IP アドレスや MAC アドレスなどのサーバーモジュールの情報が表示されます。次に例を示します。

```
-> show /CH/BL0/SP/network
/CH/BL0/SP/network
Targets:
Properties:
  type = Network Configuration
  commitpending = (Cannot show property)
  ipaddress = IPaddress
  ipdiscovery = dhcp
  ipgateway = IPgateway
  ipnetmask = 255.255.252.0
  macaddress = Macaddress
  pendingipaddress = IPaddress
  pendingipdiscovery = dhcp
  pendingipgateway = IPgateway
  pendingipnetmask = 255.255.252.0
Commands:
  cd
  set
  show
->
```

ELOM への接続

ELOM では、コマンドラインインタフェース (CLI) と Web インタフェース (WebGUI) の 2 つのインタフェースを使用できます。

- Web GUI に接続するには、「[ELOM Web GUI に接続する](#)」(21 ページ) の説明に従って Web ブラウザを使用します。
- CLI に接続するには、「[ELOM CLI に接続する](#)」(23 ページ) の説明に従って SSH を使用します。

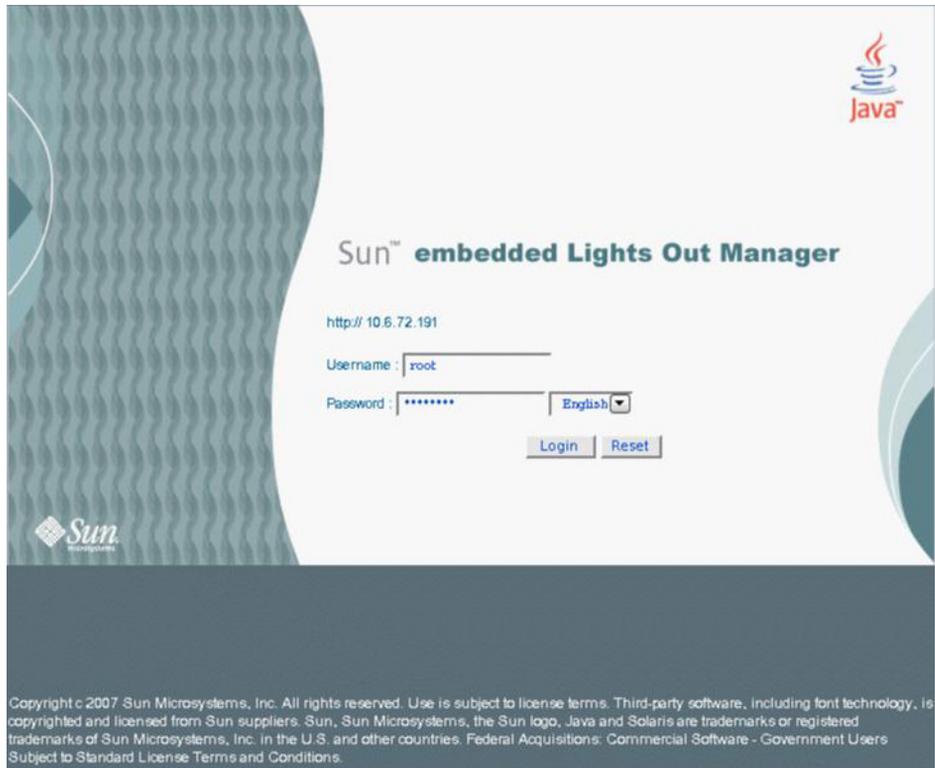
これらの手順では、サーバーモジュールの ELOM の IP アドレスを知っておく必要があります。この IP アドレスがわからない場合は、CMM iLOM と呼ばれるシャーンサービスプロセッサを使用して参照および変更できます。これについては、「[ELOM のネットワーク構成 \(省略可\)](#)」(23 ページ) を参照してください。

サービスの状態によっては、サーバーモジュールに直接接続された端末から ELOM にアクセスする必要があります。詳細は、『*Sun Blade X6450 Server Module Service Manual* (Sun Blade X6450 サーバーモジュールサービスマニュアル)』を参照してください。

▼ ELOM Web GUI に接続する

1. ELOM の IP アドレスをブラウザに入力します。
ログイン画面が表示されます。[図 2-2](#) を参照してください。

図 2-2 Web GUI のログイン画面



2. ユーザー名とパスワードを入力します。
 - デフォルトのユーザー名 : root
 - デフォルトのパスワード : changeme
3. 「Log In (ログイン)」をクリックします。

Web GUI が表示されます。
4. Web GUI からログアウトするには、「Logout (ログアウト)」ボタンをクリックします。

ログアウト画面が表示されます。

▼ ELOM CLI に接続する

1. 端末ウィンドウから次のように入力します。

```
$ ssh root@IPAddress
```

2. ユーザー名とパスワードを入力します。

- デフォルトのユーザー名: root
- デフォルトのパスワード: changeme

ログイン情報とコマンドプロンプトが表示されます。次に例を示します。

```
$ ssh root@122.138.17.17
root@122.138.17.17's password:
Sun Microsystems Embedded Lights Out Manager
Copyright 2008 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.
Hostname: SUNSP00nnnnnnnnnn
IP address: 122.138.17.17
MAC address: mm:mm:mm:mm:mm
Warning: password is set to factory default.
->
```

3. ログアウトするには、「exit」と入力します。

ELOM のネットワーク構成 (省略可)

CMM ILOM を使用すると、IP アドレスや DHCP 設定など、サーバーモジュールのネットワーク情報を変更できます。

▼ ELOM のネットワーク情報を設定する

1. CMM ILOM にログインします。

GUI を使用する場合は、『*Integrated Lights Out Manager (ILOM) Administration Guide for Sun Blade 6000 Modular System* (Sun Blade 6000 モジュラーシステム用 Integrated Lights-Out Manager (ILOM) 管理ガイド)』を参照してください。

2. /CH/BLn/SP/network に移動します。

n には、サーバーモジュールの番号 0 ~ 9 に対応した数字 (0 ~ 9) を入力します。

3. 次のコマンドを入力します。

- 静的 Ethernet 接続を指定するには次のように入力します。

```
set pendingipaddress=xxx.xxx.xx.xx
set pendingipnetmask=yyy.yyy.yyy.y
set pendingipgateway=zzz.zzz.zz.zzz
set pendingipdiscovery=static
set commitpending=true
```

xxx.xxx.xx.xx, yyy.yyy.yyy.y および zzz.zzz.zz.zzz は、それぞれ ELOM およびネットワーク構成で使用される IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイです。

- 動的 Ethernet 接続を指定するには次のように入力します。

```
set pendingipdiscovery=dhcp
set commitpending=true
```

注 - 「set commitpending=true」と入力すると変更が有効になります。

システムコンソールへのアクセス

ここでは、システムコンソールに接続する方法を説明します。

コンソールには、次の 3 つの方法でアクセスできます。

- ドングルを使用して直接アクセスする
- ELOM CLI を使用してアクセスする
- ELOM GUI および RKVM セッションを使用してアクセスする

システムコンソールを表示したあとは、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。『Sun Blade X6450 サーバーモジュールオペレーティングシステムインストールガイド』または『Sun Blade X6450 サーバーモジュール Windows オペレーティングシステムインストールガイド』も参照してください。

▼ システムコンソールに直接アクセスする

1. サーバーモジュールの前面パネルにあるドングルケーブルにキーボード、モニター、およびマウスを接続します。「[ドングルケーブルの接続](#)」(28 ページ) を参照してください。
2. サーバーの電源をオンまたはオフにするには、スタイラスを使用します (「[電源投入と電源切断 \(通常の方法\)](#)」(3 ページ) を参照)。

▼ CLI を使用してシステムコンソールにアクセスする

1. 「[ELOM への接続](#)」(21 ページ) の説明に従って ELOM に接続し、ログインします。ELOM のプロンプトが表示されます。
2. システムの電源をオンにするために、次のコマンドを入力します。
-> **set /SYS/CtrlInfo/PowerCtrl=on**
サーバーモジュールの電源投入シーケンスが開始されます。

注 – システムの電源は、スタイラスを使用してオンまたはオフにすることもできます。「[電源投入と電源切断 \(通常の方法\)](#)」(3 ページ) を参照してください。

3. シリアルコンソールを起動するために、次のコマンドを入力します。
-> **start /SP/AgentInfo/Console**
システムコンソールが表示されます。
4. システムコンソールを終了するには、Esc + Shift + 9 キーを押します。ELOM のプロンプトが表示されます。
5. システムの電源をオフにするには、ELOM で次のコマンドを入力します。
-> **set /SYS/CtrlInfo/PowerCtrl=off**

▼ Web GUI を使用してシステムコンソールにアクセスする

1. 「[ELOM Web GUI に接続する](#)」(21 ページ)の説明に従って Web GUI を起動します。
ログイン画面が表示されます。
2. デフォルトのユーザー名とパスワードを入力します。
ユーザー名: **root**
パスワード: **changeme**
3. 「Log In (ログイン)」をクリックします。
「System Information (システム情報)」画面が表示されます。
4. 「Remote Control (リモートコントロール)」タブをクリックします。
「Launch Redirection (リダイレクトの起動)」画面が表示されます。
5. 「Launch Redirection (リダイレクトの起動)」をクリックします。
画面に複数のダイアログボックスが表示されます。

注 – ブラウザとして Firefox や Mozilla を使用しているシステムでは、Java™ JRE™ バージョン 1.6 以降が必要です。

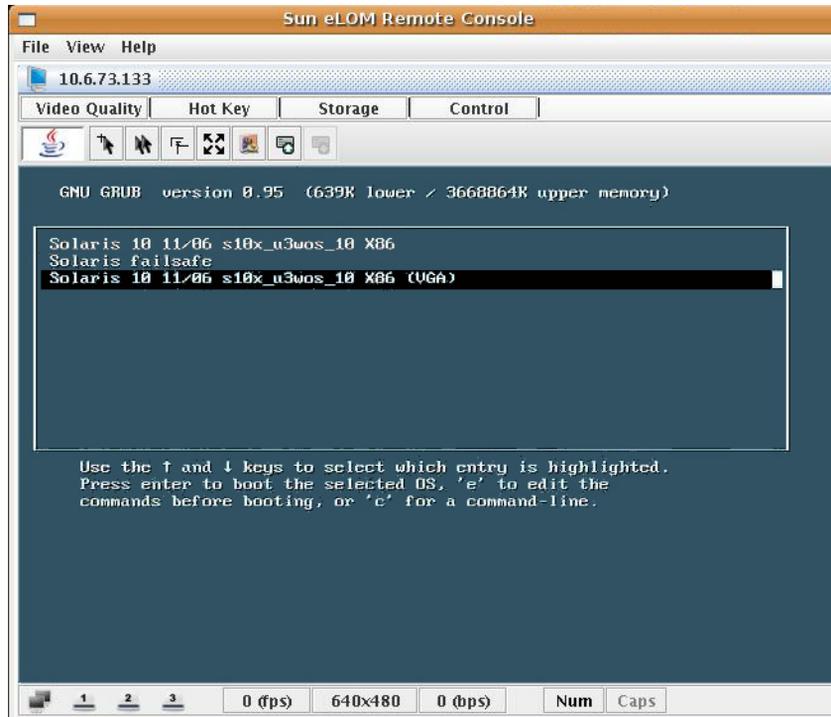
ブラウザにより、埋め込みのリモートコントロールアプリケーションが自動的にダウンロードされ、「Remote Console (リモートコンソール)」画面が表示されます。
「Remote Console (リモートコンソール)」画面が表示されない場合は、ブラウザのセキュリティコントロールによりブロックされている可能性があります。必要に応じてセキュリティのレベルを低くして、リモートコンソールを有効にします。

6. 「Remote Control (リモートコントロール)」-> 「Remote Power Control (リモート電源コントロール)」の順に選択します。
「Power Control (電源コントロール)」画面が表示されます。

注 – システムの電源は手動でオンにすることもできます。前面パネルにある電源ボタンを、スタイラスなどの非導電性の先のとがったもので押して離します。

7. 「Power On (電源オン)」ラジオボタンを選択し、次に「Submit (送信)」を選択します。
初期ブートアップメッセージが表示されます。
初期ブートアップメッセージが表示されたあとで、次の画面が表示されます。

図 2-3 ブートするオペレーティングシステムの選択



8. 矢印キーを使ってリストをスクロールし、Enter キーを押します。

注 - この例は、Solaris OS がインストールされているサーバーを示しています。別のオペレーティングシステムがインストールされているサーバーでは、選択項目が適切に変更されます。各種オペレーティングシステムの詳細は、『Sun Blade X6450サーバーモジュールオペレーティングシステムインストールガイド』または『Sun Blade X6450 サーバーモジュール Windows オペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。

ドングルケーブルの接続

シャーシに付属しているドングルケーブルを使用すると、[図 2-4](#) に示すようにサーバーモジュールの前面に直接接続できるようになります。

システムコンソールに接続するには、次の手順に従います。

- キーボードとマウスを USB コネクタに接続します。
- モニタを VGA コネクタに接続します。

ドングルケーブルは、臨時のサービス用に設計されています。通常の操作では、ELOM を使用してください。

図 2-4 ドングルケーブルの接続

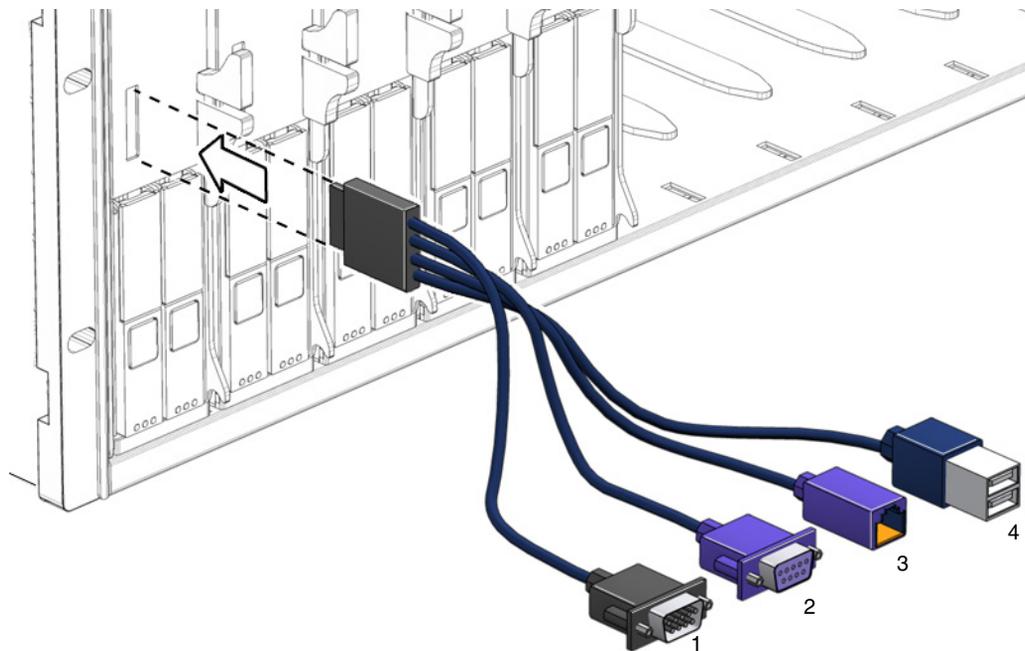


表 2-1 ドングルケーブルコネクタ

-
- | | |
|---|--|
| 1 | DB9 シリアルコンソールからサーバーモジュール ELOM
注 - このコネクタは、3 コネクタドングルにはありません。 |
| 2 | VGA ビデオコネクタ。 |
| 3 | RJ-45 コネクタ。 <ul style="list-style-type: none">• 3 コネクタドングルでは、このコネクタを ELOM へのシリアルアクセスに使用します。• 4 コネクタドングルでは、このコネクタは使用されません。 |
| 4 | デュアル USB コネクタ。 |
-



注意 - ドングルのケーブルとコネクタの物理的な損傷を避けるため、使用时以外はドングルを外してください。

インストールのためのワークシート

表 A-1 のワークシートを使用して、Solaris 10 OS の構成に必要な情報を収集します。収集するのは使用しているシステムのアプリケーションに該当する情報だけで十分です。

表 A-1 インストールのためのワークシート

インストールのための情報	説明または例	回答 (* はデフォルト)
言語	使用する言語をリストから選択します。	英語*
地域	サポート対象の地域のリストから自分の地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムはネットワークに接続されていますか?	<ul style="list-style-type: none"> ネットワークに接続されている ネットワークに接続されていない*
DHCP	ネットワークインタフェースの構成に DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) を使用できますか?	<ul style="list-style-type: none"> はい いいえ*
DHCP を使用していない場合、ネットワークアドレスを記録します。	IP アドレス	DHCP を使用していない場合、システムに IP アドレスを割り当てます。 例: 129.200.9.1
	サブネット	DHCP を使用していない場合、システムはサブネットの一部ですか? システムがサブネットの一部である場合、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0
	IPv6	このマシンで IPv6 を有効にしますか?
ホスト名	システムに指定したホスト名	

表 A-1 インストールのためのワークシート (続き)

インストールのための情報	説明または例	回答 (* はデフォルト)
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティを構成しますか? 設定する場合、次の情報を収集してください。 デフォルト Realm: 管理サーバー: 第 1 KDC: (省略可) その他の KDC:	<ul style="list-style-type: none"> • はい • いいえ*
ネームサービス	ネームサービス	<p>該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを<input type="text"/>に入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NIS+ • NIS • DNS • LDAP • なし*
ドメインネーム	システムが含まれているドメインの名前を <input type="text"/> に入力します。	
NIS+ と NIS	自分でネームサーバーを指定しますか、またはインストールプログラムによって自動的に指定しますか?	<ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定 • 自動的に指定*
DNS	DNS サーバーの IP アドレスを <input type="text"/> に入力します。少なくとも 1 個は入力する必要があります (最高 3 個)。 DNS の問い合わせ時に検索するドメインのリストも <input type="text"/> 入力できます。 検索ドメイン: 検索ドメイン: 検索ドメイン:	
LDAP	LDAP プロファイルについて次の情報を入力します。 プロファイル名: プロファイルサーバー: LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合は、次の情報を収集します。 プロキシバインド識別名: プロキシバインドパスワード:	

表 A-1 インストールのためのワークシート (続き)

インストールのための情報	説明または例	回答 (* はデフォルト)
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを手動で指定しますか、またはインストールプログラムによって自動的に指定しますか?</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジの役目を果たします。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する固有の数字です。</p> <p>次のようなオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自分で IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのレポート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。 • インストールプログラムを使用して IP アドレスを検出できます。ただしその場合は、システムがルータのあるサブネット上にあり、そのルータが ICMP ルータディスカバリプロトコルを使用して公開されている必要があります。コマンドラインインタフェースを使用する場合、システムのレポート時に IP アドレスが自動的に検出されます。 • この時点でルータを使用していないか、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。ソフトウェアは、レポート時に IP アドレスを自動的に検出します。 	<ul style="list-style-type: none"> • IP アドレスを指定 • IP アドレスを検出 • なし*
時差	デフォルトの時差を指定する方法を選択します。	<ul style="list-style-type: none"> • 地域* • GMT からのオフセット • 時差ファイル
ルートパスワード	システム用のルートパスワードを選択します。	

BIOS 構成ユーティリティを使用した Sun Blade RAID Expansion Module の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、Sun Blade RAID Expansion Module を搭載したシステムで、コントローラ、ディスクドライブやその他のデバイス、およびアレイを作成し、管理するために使用する BIOS ベースのユーティリティです。Sun Blade RAID Expansion Module を搭載したサーバーモジュールでは、このユーティリティを使用してハードドライブの初期化、ボリュームの作成、および RAID の構成を行います。

この付録は、次の節で構成されています。

- 「[BIOS RAID 構成ユーティリティの概要](#)」 (36 ページ)
- 「[BIOS RAID 構成ユーティリティでのホットプラグに関する制限事項と条件について](#)」 (36 ページ)
- 「[BIOS RAID 構成ユーティリティの実行](#)」 (38 ページ)
- 「[ACU を使用したアレイの作成と管理](#)」 (39 ページ)
- 「[-Select ユーティリティを使用した REM 設定の変更](#)」 (43 ページ)
- 「[ディスクユーティリティを使用したディスクドライブの管理](#)」 (47 ページ)
- 「[RAID アレイの初期化](#)」 (49 ページ)



注意 – Sun Blade RAID Expansion Module を搭載したサーバーでは、構成ユーティリティを使用してハードドライブを初期化してからオペレーティングシステムをインストールする必要があります。詳細は、「[RAID アレイの初期化](#)」 (49 ページ) を参照してください。

注 – ハードドライブを初期化し、オペレーティングシステムをインストールをしたあとは、BIOS RAID 構成ユーティリティーまたは Sun StorageTek™ RAID Manager グラフィカルユーザーインタフェース (GUI) を使用してさまざまな構成タスクを実行できます。これについては、『Uniform Command-Line Interface User's Guide (ユニフォームコマンドラインインタフェースユーザーズガイド)』および『Sun StorageTek RAID Manager Software User's Guide (Sun StorageTek RAID マネージャソフトウェアユーザーズガイド)』を参照してください。

BIOS RAID 構成ユーティリティーの概要

BIOS RAID 構成ユーティリティーには、次の 3 つのツールが用意されています。

- **アレイ構成ユーティリティー (ACU)** – アレイの作成と管理およびディスクドライブの初期化と再スキャンのために使用します。「[ACU を使用したアレイの作成と管理](#)」(39 ページ) を参照してください。
- **-Select ユティリティー** – SerialSelect または SATASelect。REM およびディスクドライブの設定を変更するために使用します。「[-Select ユティリティーを使用した REM 設定の変更](#)」(43 ページ) を参照してください。
- **ディスクユーティリティー** – ディスクドライブのフォーマットまたは確認のために使用します。「[ディスクユーティリティーを使用したディスクドライブの管理](#)」(47 ページ) を参照してください。

BIOS RAID 構成ユーティリティーでのホットプラグに関する制限事項と条件について

BIOS RAID 構成ユーティリティーでは、ハードディスク格納装置のホットプラグはサポートされません。ただし、SAS および SATA ハードディスクドライブ (HDD) のホットプラグ操作は、次の条件の下でハードディスク格納装置内でのみサポートされます。

- 「[ホットアンプラグによる取り外しの条件](#)」(37 ページ)
- 「[ホットプラグでの追加条件](#)」(37 ページ)
- 「[ホットアンプラグおよびホットプラグによる交換/再挿入の条件](#)」(37 ページ)

注 – コントローラが論理ドライブで、RAID ボリュームの構築、再構築、移行などの処理を実行中でビジー状態にある間は、ハードディスクドライブのホットプラグはサポートされません。

ホットアンプラグによる取り外しの条件

HDD のホットアンプラグによる取り外しは、次の条件の下でサポートされます。

- 取り外すハードディスクドライブが論理デバイスの一部でなく、ステータスが「使用可能」である必要があります。
- ハードディスクドライブを格納装置から取り外したあとに、アレイ構成ユーティリティー (ACU) のメインメニューの「Rescan Drives (ドライブの再スキャン)」オプションを使用して、バスのスキャンを実行する必要があります。
- ディスクユーティリティーにより、接続されている対象デバイスの構成が正しく報告されることを確認する必要があります。

ホットプラグでの追加条件

HDD のホットプラグでの追加は、次の条件の下でサポートされます。

- ハードディスクドライブを格納装置に追加したあとに、ACU のメインメニューの「Rescan Drives (ドライブの再スキャン)」オプションを使用して、バスのスキャンを実行する必要があります。
- ディスクユーティリティーにより、接続されている対象デバイスの構成が正しく報告されることを確認する必要があります。

ホットアンプラグおよびホットプラグによる交換/再挿入の条件

HDD のホットアンプラグおよびホットプラグによる交換/再挿入は、次の条件の下でサポートされます。

- 取り外すハードディスクドライブが論理デバイスの一部でなく、ステータスが「使用可能」である必要があります。
- ハードディスクドライブを取り外し、同じディスクドライブまたは新しいディスクドライブを同じスロットまたは別の未使用のスロットのいずれかに挿入する場合は、次のように取り外しと交換の間にバスのスキャンを実行する必要があります。

- a. 選択したハードディスクドライブを取り外します。
- b. ACU の「Rescan Drives (ドライブの再スキャン)」オプションを使用してバスのスキャンを実行します。
- c. ディスクユーティリティーにより、接続されている対象デバイスの構成が正しく報告されることを確認します。
- d. ハードディスク (新しいものまたは同じもの) を格納装置のスロット (同じスロットまたは別の未使用のスロット) に交換/再挿入します。
- e. ACU の「Rescan Drives (ドライブの再スキャン)」オプションを使用してバスのスキャンを実行します。
- f. ディスクユーティリティーにより、接続されている対象デバイスの構成が正しく報告されることを確認します。

BIOS RAID 構成ユーティリティーの実行

この節では、BIOS RAID 構成ユーティリティーの起動とナビゲートの方法を説明します。この節は、次の項で構成されています。

- [「BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動する」\(38 ページ\)](#)
- [「BIOS RAID 構成ユーティリティーをナビゲートする」\(39 ページ\)](#)

▼ BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動する

1. RKVM セッションを開始するか、キーボード、マウス、およびビデオデバイスをサーバーモジュールに接続します。
2. サーバーモジュールの電源を投入するか、起動します。
3. プロンプトが表示されたら、Ctrl + A キーを押します。
「Adaptec RAID Controller Utility (ARCU)」画面が表示されます。

ブート時にシステムのメモリーが不十分な場合は、次のメッセージが表示されます。

```
BIOS RAID Configuration Utility will load after system
initialization.Please wait... Or press <Enter> Key to attempt
loading the utility forcibly [Generally, not recommended] (システム
の初期化後に BIOS RAID 構成ユーティリティを読み込みます。お待ちください。
または、このユーティリティを強制的に読み込むには、Enter キーを押してください
(通常推奨されません))
```

注 – 新しい REM を取り付けてからはじめてコンピュータの電源を入れると、BIOS にシステムの構成に一致しない構成が表示されることがあります。これは正常な動作です。

▼ BIOS RAID 構成ユーティリティをナビゲートする

- ユーティリティのメニューのナビゲートには、キーボードの矢印、Enter、Esc などのキーを使用します。

BIOS RAID 構成ユーティリティのツールはすべてメニューから使用でき、作業を完了するために必要な指示が画面上に表示されます。

ACU を使用したアレイの作成と管理

ACU は BIOS RAID 構成ユーティリティのツールの 1 つで、アレイの作成と管理に使用します。この節は、次の項で構成されています。

- 「ACU を起動する」(40 ページ)
- 「ACU で新しいアレイを作成する」(40 ページ)
- 「ACU で既存のアレイを管理する」(41 ページ)
- 「ACU でアレイを起動可能にする」(41 ページ)
- 「ACU でディスクドライブを初期化する」(42 ページ)
- 「ACU でディスクドライブを再スキャンする」(42 ページ)
- 「ACU でディスクドライブの完全消去を実行する」(42 ページ)
- 「ACU で実行中の完全消去を停止する」(43 ページ)

▼ ACU を起動する

1. BIOS RAID 構成ユーティリティを起動します。
「[BIOS RAID 構成ユーティリティを起動する](#)」(38 ページ) を参照してください。
2. ARCU の画面で「Array Configuration Utility (アレイ構成ユーティリティ)」を選択して、Enter キーを押します。
3. 画面の指示に従い、アレイの作成と管理、ディスクドライブの初期化、再スキャン、および消去を行います。

▼ ACU で新しいアレイを作成する

注 - ACU および Sun StorageTek RAID Manager GUI を使用して、アレイを作成できます。ただし、アレイを作成する場合は、ACU よりも GUI を使用した方がすばやく処理できます。ACU を使用してアレイを作成する場合は、GUI を使用して作成する場合よりも 2 ~ 3 倍の時間がかかることがあります。詳細は、『*Sun StorageTek RAID Manager Software User's Guide* (Sun StorageTek RAID Manager ソフトウェア ユーザーズガイド)』参照してください。

1. ACU のメインメニューで「Create Arrays (アレイの作成)」を選択します。
新しいアレイに使用できるディスクドライブのみが画面に表示されます (ディスクドライブをアレイで使用するには、ディスクドライブを初期化しておく必要があります。詳細は、「[ACU でディスクドライブを初期化する](#)」(42 ページ) を参照してください)。
2. 「Array Properties (アレイのプロパティ)」メニューで、アレイの RAID レベル、サイズ、名前、ストライプのサイズ、およびキャッシュの設定を変更します。

注 - 新しいアレイを作成すると、BIOS の起動順序が変わる場合があります。BIOS の設定をチェックして、起動順序が正しいことを確認してください。

▼ ACU で既存の阵列を管理する

1. ACU のメインメニューで「Manage Arrays (阵列の管理)」を選択します。
2. 「Manage Arrays (阵列の管理)」メニューで、次のいずれかの操作を実行します。
 - 阵列のプロパティを表示します。

注 – 障害の発生したドライブは、異なる色の文字で表示されます。

- 阵列を起動可能にします。「ACU で阵列を起動可能にする」(41 ページ)を参照してください。
- ホットスペアの割り当てまたは解除を行います。
- 阵列を削除します。



注意 – データが完全に失われることがないように、阵列を削除する前にデータをバックアップしてください。

▼ ACU で阵列を起動可能にする

注 – システム BIOS で起動順序の変更が必要になる場合があります。詳細は、使用しているコンピュータのドキュメントを参照してください。

1. ACU のメインメニューで「Manage Arrays (阵列の管理)」を選択します。
2. 起動可能にする阵列を選択して、Ctrl + B キーを押します。

注 – 構築、検証、再構築のいずれかの処理を実行している阵列を起動可能にすることはできません。

阵列の番号が Array 00 に変更され、この阵列が起動阵列になります。

3. コンピュータを再起動します。

▼ ACU でディスクドライブを初期化する

ディスクドライブが灰色で表示されている場合は、新しいアレイで使用できない状態にあり、初期化する必要があります。

- ACU のメインメニューで「Initialize Drives (ドライブの初期化)」を選択します。



注意 – アレイの一部になっているディスクドライブは初期化しないでください。アレイの一部になっているディスクドライブを初期化すると、アレイが使用できなくなる場合があります。ディスクドライブを初期化する前には、ディスクドライブ内のすべてのデータをバックアップしてください。

▼ ACU でディスクドライブを再スキャンする

- ACU のメインメニューで「Rescan Drives (ドライブの再スキャン)」を選択します。

▼ ACU でディスクドライブの完全消去を実行する

ディスクドライブの完全消去を実行すると、そのディスクドライブのすべてのデータが完全に消去され、元に戻すことができなくなります。完全消去では、単に 0 を書き込むのではなく、3 種類の異なる書き込み処理を消去対象のディスクドライブに対して実行します。

完全消去の実行には、ディスクドライブをクリアする (0 を書き込む) 場合と比べて、最大で 6 倍の時間がかかります。完全消去は、機密情報が格納されているディスクドライブに対してのみ実行するようにしてください。

注 – 機密以外の情報が格納されたディスクドライブに 0 を書き込んでデータを消去するには、ディスクドライブをフォーマットするか ([「ディスクユーティリティを使用したディスクドライブの管理」](#) (47 ページ) を参照)、Sun StorageTek RAID Manager (GUI) を使用してクリアします。いずれの場合も、所要時間は完全消去に比べて大幅に短くなります。

- ACU のメインメニューで「Secure Erase (完全消去)」を選択して、「Y (はい)」を選択します。

完全消去の開始後に ACU のメインメニューに戻るには、Esc キーを押します。選択されたディスクドライブは、消去処理が完了するまで使用できません。

▼ ACU で実行中の完全消去を停止する

1. ACU のメインウィンドウで「Secure Erase (完全消去)」を選択します。
2. 完全消去を実行中のディスクドライブを選択して、Ctrl+Q キーを押します。
完全消去が停止し、ACU のメインウィンドウに戻ります。

-Select ユーティリティを使用した REM 設定の変更

BIOS RAID 構成ユーティリティには、REM および REM に接続されているディスクドライブの設定を変更するためのツールがあります。このツールは、SerialSelect または SATASelect と呼ばれています。この節は、次の項で構成されています。

- 「-Select ユーティリティの使用を開始する」(43 ページ)
- 「変更を適用して -Select ユーティリティを終了する」(44 ページ)
- 「-Select ユーティリティで一般的な設定を変更する」(44 ページ)
- 「-Select ユーティリティで SAS 固有の REM 設定を変更する」(46 ページ)

▼ -Select ユーティリティの使用を開始する

1. BIOS RAID 構成ユーティリティを起動します (「BIOS RAID 構成ユーティリティを起動する」(38 ページ) を参照)。
ARCU の画面が表示されます。
2. 「-Select utility (-Select ユーティリティ)」を選択して、Enter キーを押します。
3. 画面上の指示に従い、必要に応じて、REM および接続されているディスクドライブの設定を変更します。

▼ 変更を適用して *-Select* ユーティリティーを終了する

1. 終了するためのプロンプトが表示されるまで Esc キーを押します。
設定を変更した場合は、終了する前に変更の保存を求めるプロンプトが表示されます。
2. 「Yes (はい)」を選択して終了し、いずれかのキーを押してコンピュータを再起動します。
変更した設定は、コンピュータの再起動後に有効になります。

▼ *-Select* ユーティリティーで一般的な設定を変更する

- *-Select* ユーティリティーのメインメニューで「Controller Configuration (コントローラの構成)」を選択し、次の表に示す設定を変更します。
一部のオプションは、適用されない場合があります。

注 – デフォルトの設定は太字で示します。

表 B-1 一般的な設定

オプション	説明
Drive's Write Cache (ドライブの書き込みキャッシュ)	「 enabled (有効) 」に設定すると、ディスクドライブで書き込みキャッシュが有効になります。「 disabled (無効) 」に設定すると、ディスクドライブで書き込みキャッシュが使用されません。ディスクドライブでは書き込みキャッシュを無効にすることをお勧めします。 注意 — 書き込みキャッシュを有効にすると、まれに、停電時にデータの損失や破損が発生する場合があります。
Runtime BIOS (ランタイム BIOS)	「 enabled (有効) 」に設定すると、REM BIOS によって、この REM が起動デバイスとして動作できるようになります。「 disabled (無効) 」に設定すると、ほかの HBA が起動デバイスとして動作できるようになります。
Automatic Failover (自動フェイルオーバー)	「 enabled (有効) 」に設定すると、障害の発生したディスクドライブの交換時に、REM が自動的にアレイを再構築します。「 disabled (無効) 」に設定した場合は、アレイの再構築を手動で行う必要があります。



表 B-1 一般的な設定 (続き)

オプション	説明
Array Background Consistency Check (アレイバックグラウンド一貫性チェック)	「enabled (有効)」に設定すると、REM は冗長アレイを常時確認します。この場合、パフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。デフォルトは「disabled (無効)」です。
BBS Support (BBS サポート)	BBS をサポートしているシステムで「enabled (有効)」に設定すると、REM が BIOS の起動デバイスとして表示されます。
Array-Based BBS Support (アレイベースの BBS サポート)	BBS をサポートしているシステムで「enabled (有効)」に設定すると、REM に接続された起動デバイスが BIOS の起動デバイス選択画面に表示されます。これは論理アレイに関連する設定です。デフォルトは「disabled (無効)」です。
Physical Drives Display During POST (POST 設定時の物理ドライブの表示)	「enabled (有効)」に設定すると、接続されたディスクドライブがシステムの電源投入時の自己診断テスト (POST) 中に表示されます。ディスクドライブを表示すると、POST 全体の所要時間が数秒長くなります。デフォルトは「disabled (無効)」です。
CD-ROM Boot Support (CD-ROM ブートサポート)	「enabled (有効)」に設定すると、システムを起動用 CD から起動できます。 注 — CD は、現在のソフトウェアではサポートされていません。
Removable Media Devices Boot Support (リムーバブルメディアデバイスブートサポート)	「enabled (有効)」に設定すると、CD ドライブなどのリムーバブルメディアがサポートされます。
Alarm Control (アラーム制御)	「enabled (有効)」に設定すると、アラーム音が鳴ります。デフォルトは「enabled (有効)」です。 注 — アラームをオフ (disabled) にしても、再起動後に自動的にオンに戻ります。
SATA Native Command Queuing (NCQ) (SATA ネイティブコマンド待ち行列)	「enabled (有効)」に設定すると、NCQ が有効になります。48 台を超える SATA II ディスクドライブを接続する場合は、この機能を「disabled」にします。SATA II ディスクドライブにのみ設定できます。

▼ -Select ユーティリティーで SAS 固有の REM 設定を変更する

「-Select ユーティリティーで一般的な設定を変更する」(44 ページ) で説明した一般的な設定のほか、Sun Blade RAID Expansion Module には SAS 固有の設定があり、必要に応じて変更できます。

- **SerialSelect** ユーティリティーのメインメニューで「**PHY Configuration (PHY の構成)**」を選択し、次の表に示す設定を変更します。

注 - デフォルトの設定は太字で示します。

表 B-2 SAS 固有の REM の設定

オプション	説明
PHY Rate (PHY レート)	REM とデバイスの間でのデータ転送速度です。デフォルトの設定は「 Auto (自動) 」で、この設定では SAS カードが、必要に応じてデータ転送速度を調整できます。
CRC Checking (CRC チェック)	有効にすると、REM がシリアルバスのデータ転送の精度を検証します。デフォルトの設定は「 Yes (有効) 」です。CRC チェックをサポートしていないデバイスに REM が接続されている場合にのみ、「 No (無効) 」に設定してください。
SAS Address (SAS アドレス)	REM 上の PHY がそれぞれ異なる SAS ドメインに属するようにする場合に、この設定を使用して各 PHY の World Wide Name を指定します。デフォルトは 0 です。 注: この設定は SAS アドレスの競合を解決する場合にのみ使用します。それ以外の場合は、デフォルトの値のままにしてください。

ディスクユーティリティーを使用した ディスクドライブの管理

BIOS RAID 構成ユーティリティーには、ディスクユーティリティーというツールもあり、ディスクドライブの低レベルフォーマットまたは検証を実行できます (新しいディスクドライブは、出荷時に低レベルフォーマットされているため、あらためて低レベルフォーマットを行う必要はありません)。



注意 – ディスクドライブをフォーマットする前に、すべてのデータをバックアップしてください。フォーマットを行うと、ディスクドライブのすべてのデータが破棄されます。

この節は、次の項で構成されています。

- 「ディスクユーティリティーでディスクドライブのフォーマットまたは検証を行う」 (47 ページ)
- 「ディスクユーティリティーでディスクドライブの位置を確認する」 (48 ページ)
- 「ディスクユーティリティーでディスクドライブを識別する」 (48 ページ)

▼ ディスクユーティリティーでディスクドライブの フォーマットまたは検証を行う

1. BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動します。
「BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動する」 (38 ページ) を参照してください。
ARCU の画面が表示されます。
2. ARCU の画面で、「Disk Utilities (ディスクユーティリティー)」を選択します。
3. 対象とするディスクドライブを選択して、Enter キーを押します。
4. 「Format Disk (ディスクのフォーマット)」または「Verify Disk Media (ディスクメディアの検証)」を選択します。

▼ ディスクユーティリティーでディスクドライブの位置を確認する

注 - この機能は、アクティビティ LED の付いたディスクドライブでのみ有効です。

「Identify Drive (ドライブの識別)」機能を使用すると、LED の点滅によってディスクドライブの物理的な位置を確認できます。

1. BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動します。
「BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動する」(38 ページ) を参照してください。
2. 「Disk Utilities (ディスクユーティリティー)」を選択します。
3. 対象とするディスクドライブを選択して、Enter キーを押します。
4. 「Identify Drive (ドライブの識別)」を選択して、Enter キーを押します。
5. ディスクドライブの位置を確認したら、いずれかのキーを押します。

▼ ディスクユーティリティーでディスクドライブを識別する

システム上のディスクドライブの一覧を表示することによって、ディスクドライブを識別できます。POST 中に表示される物理ドライブのみが表示されます。

1. BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動します。
「BIOS RAID 構成ユーティリティーを起動する」(38 ページ) を参照してください。
2. 「Disk Utilities (ディスクユーティリティー)」を選択します。
「Disk Utilities (ディスクユーティリティー)」ビューに次の情報が表示されます。

表 B-3 ディスクユーティリティーで表示される情報

Location	Model	Rev#	Speed	Size
CN1=DEV1 Box0=Slot0 Exp0=phy0	メーカーの情報。	ディスクドライブのバージョン番号。	ディスクドライブの速度。	ディスクドライブのサイズ。

RAID アレイの初期化

RAID アレイを初期化するには、次の手順に従います。

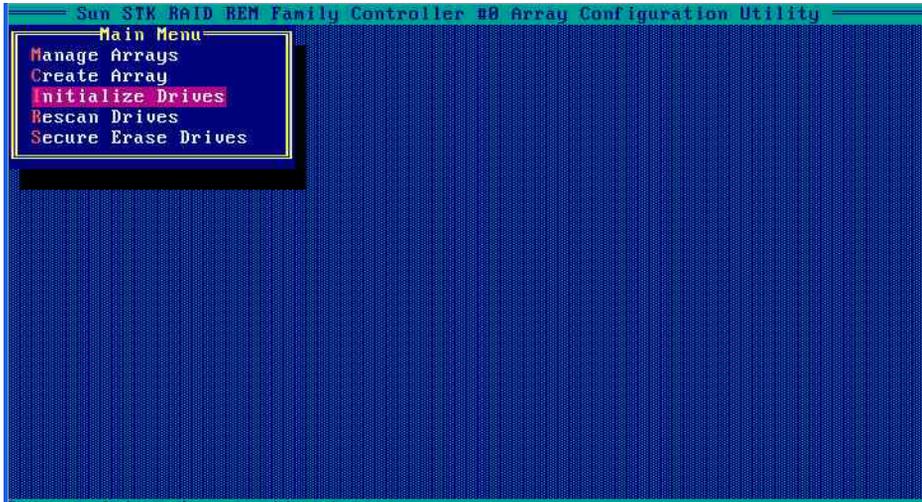
1. サーバーの電源を再投入します。
2. サーバーの起動中に Ctrl + A キーを押して、ARCUC を起動します。
メッセージが表示され、ARCUC が開きます。図 B-1 を参照してください。

図 B-1 Adaptec RAID Controller Utility (ARCUC) の初期ビュー



3. 「Array Configuration Utility (アレイ構成ユーティリティー)」を選択します。
Array Configuration Utility (アレイ構成ユーティリティー) が表示されます。

図 B-2 Array Configuration Utility (アレイ構成ユーティリティ) のビュー



4. 「Initialize Drives (ドライブの初期化)」を選択します。

ドライブの一覧が表示されます。

図 B-3 は、複数のドライブを搭載したシステムの例を示しています。

図 B-3 ドライブの一覧



5. 初期化するドライブを選択します。

- 一覧をスクロールするには、矢印キーを使用します。
- ドライブを選択するには、スペースバーを使用します。

注 – データやオペレーティングシステムを格納していないすべてのドライブを初期化する必要があります。通常、これらのドライブは、インストール済みの新しいドライブです。

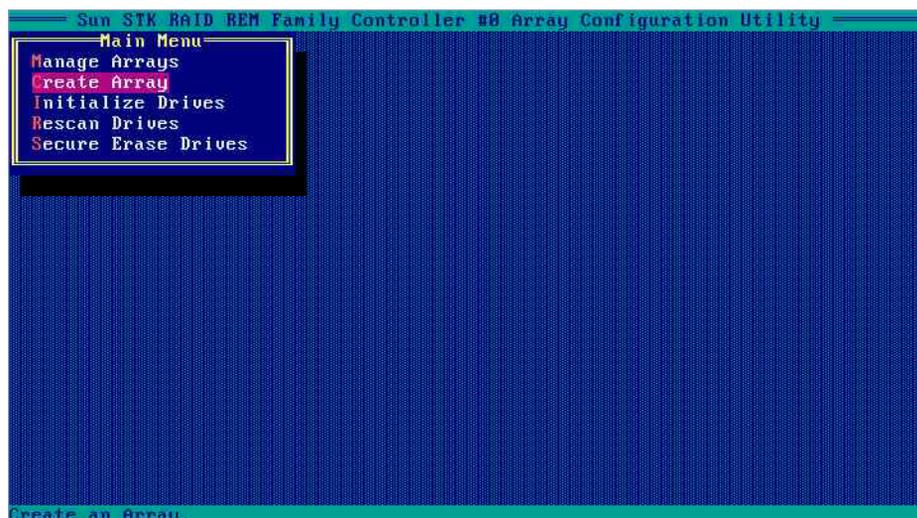
6. ドライブを選択したら、Enter キーを押します。

ドライブを初期化すると、そのドライブに格納されているすべての情報が消去されるという警告メッセージが表示されます。

7. 「yes」と入力します。

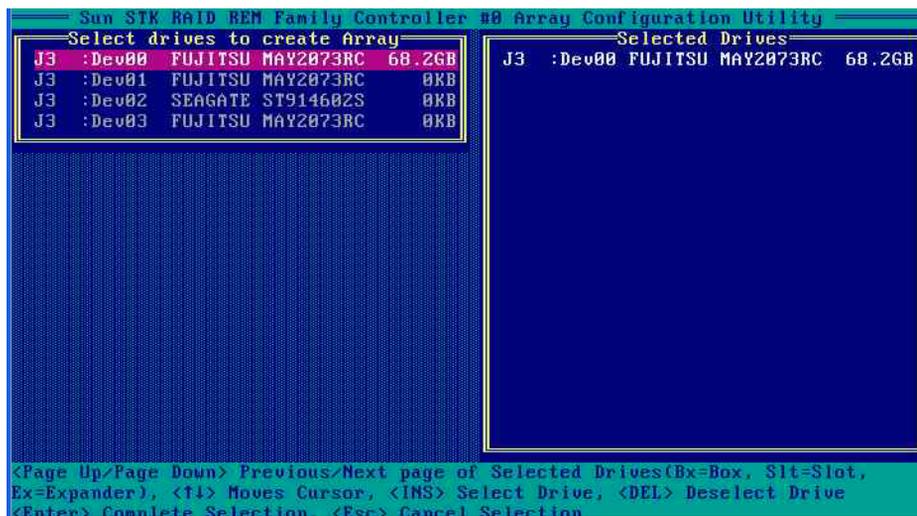
選択したドライブが初期化され、メイン画面が表示されます。

図 B-4 Array Configuration Utility (アレイ構成ユーティリティ) のビュー



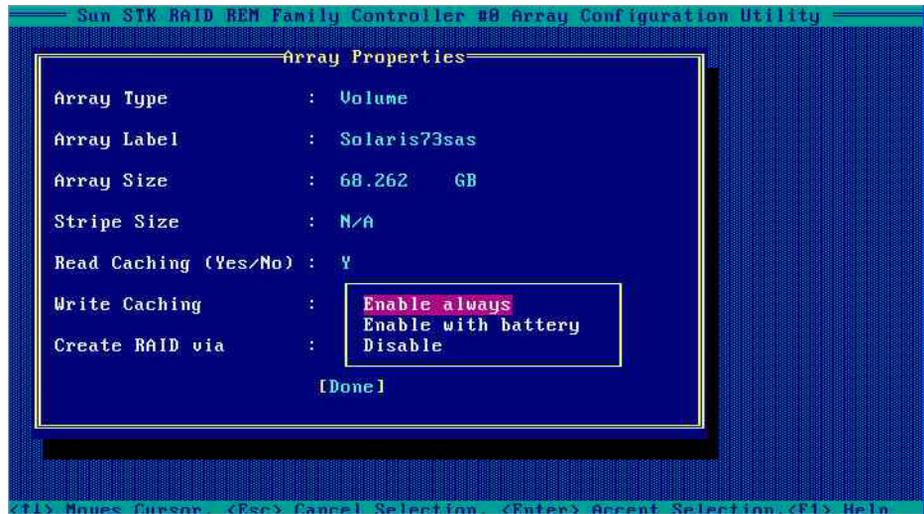
8. メインメニューの「Create Array (アレイの作成)」を選択します。
ドライブの一覧が表示されます (図 B-5 を参照)。

図 B-5 アレイに追加するドライブの一覧



9. アレイに追加するドライブを選択します。
 - 一覧をスクロールするには、矢印キーを使用します。
 - ドライブを選択するには、スペースバーを使用します。
10. ドライブを選択したら、Enter キーを押します。
「Array Properties (アレイのプロパティ)」ビューが表示されます (図 B-6 を参照)。

図 B-6 「Array Properties (アレイのプロパティ)」ビュー



11. 次の設定を行います。

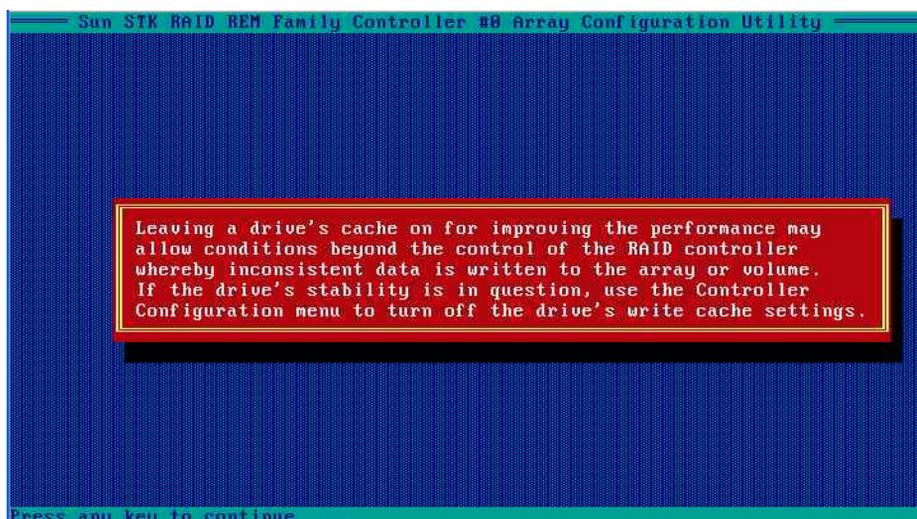
- Array Type (アレイの種類) – ドロップダウンリストでアレイの種類を選択します。
- Array Label (アレイのラベル) – ラベルを入力します。
- Stripe Size (ストライプのサイズ) – ストライプのサイズを入力します。
- Read Caching (読み取りキャッシュ) – 「Y」または「N」を入力します。
- Write Caching (書き込みキャッシュ) – 一覧でオプションを選択します。

12. Enter キーを押すか、「Done (完了)」をクリックして、操作を続行します。

「Write Caching (書き込みキャッシュ)」の設定によっては、次のように警告メッセージがいくつか表示される場合があります。

- 「Write Caching (書き込みキャッシュ)」を「Enable Always (常に有効)」に設定したときにバッテリーが存在しないか、充電不足の場合は、警告メッセージがいくつか表示される可能性があります。その場合、操作を続行するには、「Yes」と入力し、「Array Properties (アレイのプロパティ)」画面に戻るには、「No」と入力します。
- 書き込みキャッシュを有効にすると、書き込みキャッシュの警告メッセージが表示されます (図 B-7)。

図 B-7 書き込みキャッシュの警告メッセージ



13. Enter キーを押して、操作を続行します。
アレイが初期化されます。

索引

A

ACU

- アレイの管理 41
- アレイの作成 40
- ディスクドライブの再スキャン 42
- ディスクドライブの初期化 42
- ディスクドライブのセキュア消去 42
- ブート可能アレイの作成 41

Adaptec RAID Controller Utility (ARCU) 38

Array Background Consistency Check の設定 45

Array Configuration Utility → 「ACU」を参照

B

BBS サポートの設定 45

BIOS RAID 構成ユーティリティー 35

C

CD-ROM ブートサポートの設定 45

CMM ILOM 23

CMM ILOM によるネットワークの構成 23

CRC チェックの設定 46

E

ELOM

- web GUI 21
- コマンドラインインタフェース 21
- ブラウザ 21

ELOM、接続 21

Embedded LOM

定義 1

デフォルトのユーザー名とパスワード 22, 23

ログイン 23

P

Phy レートの設定 46

POST 設定時の物理ドライブの表示 45

R

RAID

Expansion Module (REM) 13

構成 13

root パスワード

デフォルト 19, 22, 23

S

SAS アドレスの設定 46

SAS コントローラ

CRC チェックの設定 46

Phy レートの設定 46

SAS アドレスの設定 46

-Select ユーティリティーによる変更 46

SATASelect 43

-Select ユーティリティー 43

起動 43

終了 44

変更の適用 44

SerialSelect 43

U

USB デバイスへの接続 29

あ

アラームコントロールの設定 45

アレイ

ACU による管理 41

作成 (ACU) 40

ブート可能アレイの作成 41

アレイベースの BBS サポートの設定 45

位置特定 LED 4

オペレーティングシステム 14

か

確認、ディスクドライブ 47

概要、設置 2

緊急シャットダウン 5

コネクタ 48

コントローラ

Array Background Consistency Check の設定 45

BBS サポートの設定 45

CD-ROM ブートサポートの設定 45

POST 設定時の物理ドライブの表示 45

-Select ユーティリティによる設定の変更 43

アラームコントロールの設定 45

アレイベースの BBS サポートの設定 45

一般設定の変更 44

自動フェイルオーバーの設定 44

ドライブの書き込みキャッシュの設定 44

ランタイム BIOS の設定 44

リムーバブルメディアデバイスブートサポート
の設定 45

さ

再スキャン、ディスクドライブ 42

サーバーモジュール

設置 17

前面パネル 4, 7, 49, 50, 51, 52, 53, 54

挿入 17

定義 1

サービスプロセッサ 1

シャーシ、定義 1

シャットダウン

緊急 5

適切な順序での 5

初期化、ディスクドライブ 42

シリアルコネクタ 29

自動フェイルオーバーの設定 44

スタイラス

電源切断用 5

電源投入用 3

スタンバイ電源、適用 3

製品アップデート x

セキュア消去、ディスクドライブ 42

設置の概要 2

接続、ELOM 21

た

適切な順序でのシャットダウン 5

ディスクドライブ

確認 47

再スキャン 42

識別 48

初期化 42

セキュア消去 42

フォーマット 47

電源

Embedded LOM による電源投入 26

スタンバイ電源の投入 3

電源切断 5

電源投入 3

電源のシャットダウン 5

ドライバアップデート x

ドライブの書き込みキャッシュの設定 44

は

パスワード

root 19, 22, 23

デフォルト 19, 22, 23

パラレルコネクタ 29

ファームウェアアップデート x

フォーマット、ディスクドライブ 47

ブート可能アレイ、作成 41

ブートローダー 9
プリインストールされた Solaris オペレーティング
システムからの問い合わせ用ワークシート 31

や

用語の定義 1

ら

ランタイム BIOS の設定 44
リダイレクト、起動 26
リダイレクトの起動 26
リムーバブルメディアデバイスブートサポート
の設定 45
リモートコンソール
起動 26
問題 26
リモートドライブ 1
ローカルドライブ 1
ログイン、Embedded LOM 23

